



部 た 生

屋 ち き

宮 の も

本 輝 の

新潮社

生きものたちの部屋

一九九五年六月一日発行

著者 宮本 輝

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話 (編集部) 03-3266-5411
(読者係) 03-3266-5111

振替 〇〇一四〇一五八〇八

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社



© Teru Miyamoto 1995,
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-10-332509-7 C0095

目次

生きものたちの部屋 7

絵具 21

インクと万年筆 35

エーゲ海の壺 49

軽井沢の仕事場 61

腕時計 73

地球儀 95

へんてこりんな犬 107

ゴルフ道具 131

再び、ゴルフ道具 143

酒と酒器 155

耳の世界 169

大晦日の書齋 181

平成七年一月十七日からの日記 193

装幀・装画・本文カット

望月通陽

生きものたちの部屋

生きものたちの部屋



私の家は、兵庫県伊丹市の北のはずれに建っている。道路ひとつへだてたところは宝塚市なので、真正正銘の伊丹市の〈はずれ〉ということになる。

この木造の二階家には、昭和五十四年の十月に引っ越してきた。ある人のご好意で、土地を貸していただけることになり、友人の建築屋さんが、ほとんど儲けを度外視して建ててくれるというので、こんなにうまい話はないと思い、相手の気が変わらぬうちにと、あちこちで借金をして工事に着手したとたん、私は肺結核で入院しなければならぬはめとなった。

しかし、そのとき、すでに資材を購入し、工事も始まっていたので、しばらく中止というわけにもいかず、ええい、なんとかなるだろうと肚を決めるしかなかった。

だから、家は私が入院中にあらかた建ってしまい、退院して自宅で療養中に完成した。上棟式には、病院から抜け出して、建築屋さんの車で駆けつけ、終わるとそのまま病院に戻ったという思い出がある。

つまり、私は昭和五十三年の春に芥川賞を受け、その翌年の一月に入院し、約一年間、療養生活をおくったので、いま住んでいる家の書斎で、作家になってからのほとんどの小説や随筆を書きつづけてきたことになる。

家の東側と北側は田圃で、南西側には神社がある。この神社の樹木のお陰で、夏の午後には、西陽に照らされるということがない。その代わり、東側の、細い川の向こうに中学校があり、朝は朝礼で怒鳴りちらす先生の声が響きわたり、午後は、クラブ活動のバスバンド部のすさまじい騒音に頭をかかえる。

それがやっと終わると、こんどは大阪空港で離着陸する飛行機が、我が家の上を飛んでいく。この飛行機に、私は十数年間、何度、下から石を投げつけてやろうと思ったかしれない。その飛行機のラッシュ時間が終わる夜の七時半ごろ、私は、溜息をつきながら、二

階の、東側に面した書斎の扉をあける。

家の者は、二階の書斎にあがって行く私のうしろ姿を見て、ときおり忍び笑いを洩らす。世の中に、これほど重い物を背負っているかに映るうしろ姿はないらしいのだが、実際、これから書斎にこもって小説を書かねばならない人間の心の重さなど、どんな言葉を駆使しても表現できないだろう。

書斎は、窓のある東側と南側以外は、すべて作りつけの本棚になっていて、そこには、いまや整理不能なくらいに本がつまっている。東側の窓ぎわの仕事机は、奥行き一メートル、幅二メートル三十センチあるのだが、辞書や灰皿や電話や手帳や、読みかけの本とか資料類が散乱して、やっとなき、わずかに原稿用紙を置く空間が作れるといったありさまなのだ。

床には万年床が敷いてある。夏でも、冬でも、私は仕事机に向かう前に、必ずこの万年床にもぐり込んで三十分ほど目を閉じる。体調のいいときは、そのまま一時間ほど眠ってしまうが、眠れないと、いらいらして起きあがり、何回も何回も舌打ちをしながら、

「あーあ、なんで俺は小説家になんかなってしもたんやろ」

などとひとりごとを言い、椅子に坐って頬杖をついたり、茶をのんだり、煙草を吸った

りして、無駄な時間をすごしている。そうやって、疲れたサラリーマンが、ええい、ままよと朝の満員電車に乗り込むために、万年筆にインクをつけ、原稿用紙の升目をうずめ始める。五時間かかって二行しか書けない日もあるし、三時間で二十枚書いてしまう日もある。しかし、どっちの場合も、事前に予測はつかない。書いてみなければわからないとしか言いようがない……。

言うまでもなく、無から有を生じるといった類いの仕事は、つまるところ、絶対的な意志と生命力だけが頼りである。だから、本当は、〈書いてみなければわからない〉などとうそびえているあいだは、いつまでたっても亀の歩み以上には進まないものなのだ。

そんな当然のことを、私は仕事を終わると忘れてしまい、翌日になって、再び仕事を始めるまでに、強引に思い出すという繰り返しを重ねてきたのだった。

強引に思い出すために、私は自分を天才だと考え、魔法使いなのだと言い聞かせ、自分の創造力は枯れることがなく、意志は病的に強く、仕事を終えるまでは決して病気にかけられないのだと信じ込もうとする。

そのような自分であることを信じるために、毎日毎日、舌打ちをしたり、深い溜息をついたり、爪を噛んだり、万年床にもぐり込んだり、古典を読み返してみたりといった儀式

をつづけているのだと思う。そのつまらない儀式に費やす厩大な時間もまた、書斎というひとりっきりの部屋における思惟的営為だとしたら、作家の書斎のことなんか他人に語るべきものではないはずなのだ。

にもかかわらず、私は私の書斎で何物かを生みだしてきた奇妙な時間と、その時間のなかにいた私について少し語ってみたいと思う。それらはすべて私のフラグメントなので、非論理的でとりとめがなく一貫性もないのだが、ある種の気配は伝えるであらうから。

私を魔法使いにさせるために最も必要なのは〈触発〉という感情である。この感情が湧かなければ、私のなかの火打ち石は火花を發しない。しかも、〈触発〉は、私以外の物によるしかない。小説を書きだしたところ、私を触発するものは、ほとんど〈風景〉であった。ひとつの風景に魅せられると、私はそれを核として一篇の小説を創りあげることができた。「川三部作」も、「幻の光」も「錦繡」も、固定して動かないたった一枚の絵とか写真によって、私のなかで形をとり始め、やがて動きだし、言葉としてつづられていったものである。私の短篇小説の多くも、一瞬の風景がわずかに肥大したにすぎない。

「西瓜トラック」という短篇小説を書いたのが、いつごろのことだったのか忘れてしまっ

た。三十枚の短篇を渡す期日が迫ってきて、締切りはもうあさつてという日、私は、私という人間のポケットにあるガラクタを書斎の机の上に並べていった。ガラクタは無数にあるが、どれも私を触発してこなかった。

私は、机の上に並べた見えないガラクタを床にぶちまけ、頭をかかえ、

「落ち着け、落ち着け。俺は天才やろう？ 絶対に、何かの短篇の素材が湧いてくるから、焦るな、焦るな」

と言い聞かせた。私は煙草を吸いながら、東側の窓をあけた。中学校のほうから、かなり年代物のトラックがやって来て、こわれかけたエンジンをあえがせながら、神社への道に消えた。埃まみれの荷台に青年がひとり坐っていた。

私は、あのトラックに似たものを、かつて見たことがあるような気がした。まだ作家になる前、京都の手前の国道で、西瓜を山積みしたトラックを見たことがあったのだ。

ボール紙にマジックインクで「大七百円、小四百円。甘い熊本のスイカ」と書かれていた。とにかく暑い日で、私は自動販売機でジュースを買い、そのトラックを見るともなしに見やった。すると、汗まみれのランニングシャツを着たトラックの男が、私に西瓜を買わないかと声をかけてきた。